東郷村報

第156号

昭和39年9月15日
発行所
宮崎県東旧杵郡
東郷村役場

牧水祭記念号

牧水祭を迎えて

牧水顕彰会長　黒木松美

九月十七日は牧水先生の第三十六回忌にあたりますので、本年も「牧水祭」を行いまして先生の御遺業をしのぶこととといたしました。

最近特に先生に対する研究も盛んになり、先生に関する著書も多くの文学者から刊行されています。先生の歌碑、詩碑も北は北海道から南は、鹿児島に至る先生にゆかりの地に建てられて、その数四十になんなんとしています。このことから見ましても先生が如何に秀れた歌人であったか、また民衆に敬愛された歌人であったかは明らかな事実であります。

先生の格調高い短歌「幾山河」をはじめ「白鳥は」「うす紅に」「白玉の」の歌などは、全国民に口ずさまれ、その生活に無限のうるおいと深みとはげみを与えています。この偉大なる歌人、牧水先生と郷土を同じくする私共東郷村民にとりましては、限りなき誇りを持ちますとともに、その反面また重い責務を痛感いたしています。

若山牧水顕彰会を結成いたしましたのは、昭和二十六年でありますからすでに十三年を経たのでありますが、その間の顕彰会の事業を顧みますとき誠に微々たるもので慚愧に堪えません

洋の東西を問わずその国文化の向上につくした人々の遺物遺跡を後世に残して文化の向上に資することは、その国民に課せられた名誉ある責務であります。牧水先生の生家をはじめ遺墨遺品、或は先生が幼き日喜戯された山河など保存して、わが国文学の進展に寄与することは、私共東郷村民に課せられた栄誉ある務めであると信じます。

然しこの事業は坦々たる道ではなく、なお多くの困難が伴いますので、単に顕彰会の力のみでは到底成就し得る事業ではなく、村民各位の深い理解と協力を得て、初めて可能の事業であると確信いたしています。今後村民各位は勿論世の大方の方々の御協力を得てこの事業を完遂して文化の振展に資したい所存であります。牧水祭に当り皆様方の御指導御協力を切に願いたします。

在りし日の若山牧水先生

1　旅と牧水

―大悟法利雄著「旅と酒と歌若山牧水」から

心細いよ
一位の笠に
かかる時雨の
船津越え

「心細いよ木曾路の旅は、笠に木の葉が舞いかかる」という伊那節の歌を知っている人なら、この歌もやはりそうした古い伊那節の歌の一つとでも思うだろう。ところが、これはそうではなくて、牧水の作、しかもいわゆる新作民謡のような机上の空想の作ではなく、実感実情そのままにうたったものなのである。

それは大正一〇年の秋、九月中旬に沼津を出た牧水は、信州白骨温泉に二〇日間ばかり滞在したのち、上高地に出、焼岳を越えて飛騨にはいり、高山町、古川町などを回って、一〇月二一日朝、折からの時雨の中をひとり船津町に向った。途中神原峠という所にかかると、雨はいよいよはげしくなり、さしていた洋がさなど役に立たないので、古川町で買ってきた一位笠（桧笠と同じようなもの。一位は木の名で、あららぎともいう）をかぶった。牧水はわらじきゃはん、着物は尻端折りという服装だったから、その笠は似合ったに相違ない。ただひとり越えゆく晩秋の峠路、風につれて降り強む時雨が笠に立てる音、それをそのままうたったのが、右にあげた歌なのである。牧水はその即興の歌を、かねてから愛唱する伊那節の調子で、繰り返し繰返しうたいながら、涙をぽろぽろとこぼしつつ歩いたという。

牧水とはそういう旅をした人で、旅行家というよりは、どうしても「旅人」という感じである。

幾山河越えさりゆかば寂しさの
はてなむ国ぞけふも旅ゆく

これはその二一才の作で牧水一生の代表作として広く愛唱されているが、牧水自身が若いときから愛唱していた詩が二つある。その一つは、上田敏訳の「海潮音」の中の有名なカール・ブッセ作の

山のあなたの空遠く
「幸」住むと人のいふ
噫われひとと尋めゆきて
涙さしぐみかへりきぬ
山のあなたになほ遠く
「幸」住むと人のいふ

であり、いま一つは

行かむがために行く者こそ
まことの旅人なれ
心は気球の如くに軽く
身は悪運の手より逃れ得ず
何の故とも知らずして
ただ行かんかな行かんかな

と叫ぶというので、牧水は青年時代から晩年まで、酒席でちょっといいぐあいに酒が回り陶然としてくると、つと立ちあがって、さびのあるしかも何ともいえぬつやのある朗々たる声で、これらの詩を朗詠し、聞く者をうっとりさせるのが常であった。

「幾山河」「山のあなたの」「行かむがために」のこの三つには、かなり共通した気分が流れているが、牧水の旅の気持ちは、そういうものだったと解しても誤りではないだろう。

何にしても、牧水ほど、旅を愛した人はめずらしく旅といえばすぐに、昔の西行法師、松尾芭蕉、若山牧水というふうに並べられるくらい、まったくこの三人ほど「旅人」と呼ぶにふさわしい詩人はなく、おそらく今後はもうこういう感じの人は出てこないだろう。

※　※

牧水は一生和服で通した人であるから、旅に出るときも和服にわらじきゃはんであった。わらじについて牧水自身

「わたしは、わらじを愛する、あの、枯れたわらで柔かにまた巧みに、つくられたわらじを。あのわらじをほどよく両足にはきしめて大地の上に立つと、急に五体の締まるのを感ずる。からだの重みをしっかりと地の上に感じ、そこから発した筋肉の動きが、また実にこころよく四肢五体に伝わってゆくのを覚える。呼吸は安らかに、やがて手足は順序よく動き出す。そして自分のからだのために動かされた四辺の空気が、いかにも心地よく自分の身に触れてくる。」

とも、また

「そうなったわらじを捨てるときがまたあはれである。いかにもここまで道づれになってきた友人にでも別れるようなうら寂しい離別の心がわく。「では、さようなら―」よくそう声に出して言いながら、わたしはその古わらじを道ばたの草むらの中に捨てる。ひとり旅のときはことにそうである。

とも書いているが、わらじを愛し、またたいせつにすることは非常なものであった。

着物の下には毛糸のシャツとももひき、腰にはタオルその他を入れた皮の袋とはきかえのわらじとぶらさげ、ふところにはたいていつ手帳と鉛筆とを押し込んでいる。それは旅中につくった歌を書いたり、後に紀行文を書くために、種々な心覚えをしるしたりするためのものだが、その手帳も、ときには小学生の使ういちばん粗末な雑記帳だったりする。

帽子はたいていのばあいは鳥打ち帽、そして手にはつえ代わりと雨の用心とのために、じょうぶな洋がさ一本。それで歩きやすいように尻端折りをしているのだから、その旅姿は今の青年たちが見たこともないような古風なもの。それに元来が小男で、色は黒く、年よりもふけて見えるほうだったから、その当時としても、一見これが天下の歌人若山牧水とは受けとりにいものので、旅館の玄関に立ったとき、上客と見られるものではなかった。しかし、牧水自身にとってはそれがもっともしっくりした、もっとも快適な服装であったのだ。

いざ行かむ行きてはまだ
見ぬ山を見む
このさびしさに君や耐ふ
るや
問ふなかれいまはみづか
らえもわかず
ひとすぢにただ山の恋し
き

これは初期の歌だが、牧水は海よりも山のほうに多く心をひかれていた。そして信州、上州などという山国にもっとも多く出かけているけれど、いわゆる登山が目的ではなく、山を愛するとはいっても、それほど多くの山には登っていない。

※　※

牧水が山にひかれたのは一つは草や木に対する深い愛情で、その歌や紀行文を読むならば、読者は深い深い愛情のこもった目で森の木々に対し、足もとの草に見入ったその姿を至る所に見いだすであろう。一枚の木の葉も一茎の草花も、牧水にとっては決して生命なく霊なき物ではなかったのである。

山に入り雪の中なる朴の
木に落葉松に
なにともものをいふべき枯
れし葉とおもふもみぢの
ふくみたる

この紅ゐをなにと申さむ

それから、また牧水は、ひどく小鳥の声を愛した。ほととぎす、郭公、筒鳥、仏法僧、その他若葉の山に鳴く小鳥たちの声に、どれほど大きな愛着をもっていたかは、その紀行文を読めばすぐわかる。

だが、その山を恋うる心にはいま一つの大きな原因がある。それは、山には付き物の水、すなわち渓流である。牧水は、つぎのように書いている。

「元来わたくしは峡谷の、しかもただちに渓流に沿うた家に生れた。そして一〇才までをそこで育った。そんなことのあるためか、渓谷というといったいに心をひかれやすい。それもこの二、三年来、からだが少し弱って、何ということなく静かな所をと求めるようになってから、ことにそれが著しくなった。岩を伝うて流れ落つる水、その響き、岩には落葉が散りたまって黄いろな秋の日ざしている……そうした場所を思い出すごとに、ほんとに心の底が痛むようなせつなさを感ずるのが常である。

そういう牧水が、信州、上州あたりの高原や渓谷に強くひかれたのは当然である。牧水の紀行文を読みながら、地図を開いて調べてみると、千曲川や利根川の渓々、当時としてはよくもまあこんな所にまで、と思われる奥のほうまで入り込んでいるのに驚くであろう。

旅の好きな人は多いが、牧水ほど旅を熱愛した者はまれである。それはもう趣味だとか嗜好だとかいうようなものではなく、旅は生命の欲求であり、霊魂の渇望であったのである。それゆえにこそ、牧水の旅は「旅が牧水か、牧水が旅か」と思われるような、それこそ天衣無縫ともいうべき境地をつくり出し、それが歌や紀行文にあらわれて限りなき魅力となって読者をとらえるのである。

2　酒と牧水

牧水の酒で、もっとも有名なのは

白玉の歯にしみとほる秋
の夜の
酒はしづかに飲むべかり
けり

で、まず知らない人はないくらい、古今の酒の歌の中で第一の名歌といってよかろう。これは、二五才の秋漂泊の旅に出ていたときの作だが、牧水がほんとうに好んだのは、こうしてひとり静かにたしなむ酒であった。無類の酒好きとはいうものの、大杯でぐいぐいやるというような型ではなく杯も小さいものを好み、そのきよしゃな手にいかにもかっこうよく持って、静かに飲んでいる姿はほんとうに楽しそうで、石下戸の私の目にも実にほほえましかった。

時をおき老樹の雫（しづく）おつ
るごと静けき酒は
朝にことすれ

鉄瓶のふちに枕しねむたげに徳利かたむく

いざわれも寝むというような歌がある。どちらも旅中の作だけれど、これにも、そうした静かな牧水の姿はよく出ている。

晩年の作に「この頃取り出でて用いたる」という詞書（ことばがき）をつけた。

青柳に蝙蝠あそぶ絵模様の
藍深きかもこの盃に

という歌があるが、その杯は、長崎のある門下から贈られて愛用していた小形のもので、歿後その棺の中にまで入れられたが、焼きがよいために、火葬の際の高熱にもいささかもいたむことなく残っていたので、いま若山家に残されている。

いったいに、牧水の酒は静かなよい酒で、そうとうに過しても乱れるようなことはなかった。そして酔えば酔うほど機嫌がよくなり、飲むだけ飲めば、ほんの申しわけだけ飯を食べて寝室に引あげてしまうのであった。

しかしそうかといって、にぎやかな酒がきらいだったわけではなく、親しい友人などがくると、料理屋に案内し、芸者を呼んでにぎやかに飲むこともよくやった。そして、深夜になってもまだ飲み足らず、ついには遊廊に車を飛ばして、徹夜痛飲するというようなこともあったが、ただそういうときにも酔ってばか騒ぎをやるようなことはなく、さびのある美しい声で、天下一品という定評のある短歌や詩の朗詠をやったり、また旅ざきで習い覚えたお得意の木曾節、伊那節、その他の民謡をうたうくらいのものであった。

牧水は、旅人として西行や芭蕉と並べられるほどに旅を愛したが、旅中でももちろん酒はなくてはならなかった。牧水のもっとも好んだの中、山や高原や渓谷などのひとり旅で、そういう山村の宿に泊るときにはよい酒はないので、どんな

（二めんにつづく）

ひどい地酒でも飲んだし、道ばたの茶店で行商人や荷馬車ひきなどにまじって、コップ酒などもやった。そしていなかの宿屋で、運わるく酒がないばあいなど、

頼みきし
その酒なしと
この宿の主人言ふなる
破れたる紙幣とりいで
お頼み申す隣村まで
一走り行て買い来てよ
その酒の来る待ちがてに
いまいちど入るよ温泉に
壁もなき吹きさらしの湯に

という調子にもなるのである。

寂しいひとり旅を好んだくせに、またひどく寂しがりやの一面もあって、そうした旅行中でもふと会いたくなって、よく友人を訪ねていっている。会えば勿論酒、そして別れかねてはついつい飲み過すことになりはては旅行の日程を狂わせてしまうようなことが珍しくなかった。弟子たちは、いつも牧水が飲み過ぎてからだをこわすことを心配して、手紙などではよく節酒を勧めてくるのだが、それでも牧水を迎えてその喜ぶ顔を見ては、どうしても酒を勧めずにはいられなかった。

※　※

牧水の酒についてはいろいろな逸話もあるが、わたしに一つ忘れられないことがある。それはもう晩年のことだが、ある日牧水は二階のへやで揮毫したついでに、かねて頼まれていた、自筆の半折の酒の歌の箱書きをやることになった。そして真新しい桐箱のふたに墨黒々と「酒の歌」と書きかけたが、つい誤って「酒の酒」と書いてしまった。そばで見ていたわたしがはっとしてそれを注意するとちょっと驚いて、しばらく何か考えていたが、やがてまた筆をとると下の「酒」という字に「ウタ」とかなを振ったではないか。つまり「酒の酒」とやったのである。

なるほど、これはいい、牧水にとっては「酒」と「歌」とは決して別の二つのものではないのである。わたしはフームとうならざるにはいられなかった。

※　※

牧水の酒の歌三〇〇首ばかりの中から
たぽたぽと樽に満ちたる
酒は鳴る
さびしき心うちつれて鳴る
秋かぜや日本の国の稲の穂の
酒のあぢはい日にまさり
来れ
それほどにうまきかと人の
のとひたらば
なんと答へむこの酒の味
口にしてうまきこの酒心には
さびしみおもひゆふべゆ
ふべ酌む
酒やめむそれはともあれ
ながき日の
ゆふぐれごろにならば何
とせむ
朝酒はやめむ昼さけせん
もなし
ゆふがたばかり少し飲ま
しめ
うまきものこころにならべそれこれと
くらべ廻せど酒にしかめ
や
人の世にたのしみ多しし
かれども
酒なしにしてなにのたの
しみ
寂しみて生けるいのちの
ただひとつ
道づれとこそ酒をおもふ
に
ふくみたる酒のにほひの
おのづから
独り匂へるわが心かも

牧水先生の生家

牧水とその歌碑

ふるさとの尾鈴の山のかなしさよ秋も霞のたなびきてをり（9）

郷土の人たちによって建てられ昭和二二年一一月一七日に除幕式を行った。

なつかしき城山の鐘鳴り出でぬ幼なかりし日ききし如くに（3）

延岡の城山頂上に昭和一〇年三月に建てられた。昭和二年七月朝鮮旅行の帰り延岡に寄り谷邸に泊った牧水が小学生、中学生のころいつも聞いていたその鐘を聞いて、なつかしさにたえずこの歌をつくった。

うす紅に葉はいちはやく萌えいでて咲かむとすなり山ざくら花（17）

牧水の母校旧県立延岡中学（現、延岡高校）に昭和三十二年九月十七日に建立

ふるさとのお秀が墓に草枯れむ海にむかへるかの岡の上に（28）

細島の御鉾ケ浦に昭和三十六年七月建てられた。お秀は牧水が早稲田大学時代に、女子大学生で非常な才媛、同郷人であるし文学的な趣味もあったので親しい間柄であった。ひでは病気で明治四十年帰郷する途中大阪で死亡、この歌は牧水の歌集「別離」所載のもの

海よかげれ水平線の黝みより雲よ出で来て海わたれかし（34）

昭和三十八年九月美々津権現崎に建設

美々津は牧水が生れて初めて海というものを見た感激の地である。歌集「みなかみ」には、ここでつくった歌がたくさん収められているこの歌はその中の一首である。

幾山河こえさりゆかば寂しさのはてなむ国ぞけふも旅ゆく（32）

高千穂峡に昭和三八年四月建設

ふるさとの尾鈴の山のかなしさよ秋も霞のたなびきてをり（29）

都農町の駅前に昭和三六年七月除幕、都農町には姉が河野家にとついでいたため、牧水にとっては縁故の深い地

日向の国都井の岬の黒潮に入りゆく端にひとり海見る（8）

日南都井の岬に昭和二二年九月除幕、牧水が二十一才の夏、帰省中に、都井村に出かせぎに来ていた父を訪ねたときの作

有明の月は冴えつつ霧島のやまの溪間に霧たちわたる（6）

大正一四年一二月、霧島栄之尾温泉に建設

新墾（にひはり）のこの坂路の裾とほし友のすがたの其処ゆ登り来（25）

われ三たび此処に来りつ家のあるじさび定まりて静かなるかも（26）

ともに北九州市戸畑に昭和三六年五月に除幕。

窓前に瀬戸はいつしか瀬となりぬ白き浪たちほとときす啼く（36）

愛媛県岩城島に昭和三八年一〇月除幕、岩城島は牧水の古い門下三浦敏夫の住んでいるところ、牧水は大正二年五月、郷里の家を出て上京する途中に訪問

鴉島（からすじま）かげりて黒き磯の岩に千鳥こをれ漕ぎよれば見ゆ（7）

山口県柳井市鴉島に昭和十九年夏完成、鴉島の磯の岩に刻まれており、この岩は干潮のときは島続きとなり満潮には海中に孤立する島。この歌碑の出来た由来は大悟法利雄氏著の「若山牧水」によると

「元来この島は無人島で戦時中は軍の敵前上陸の練習地として使用されていたのを、所有者の村上家から軍に献納したところ、軍でもお礼に何かしてあげたいということになり、それでは大正一四年秋に若山牧水が来遊したときの歌があるから、記念の歌碑をつくってもらえないだろうかという村上家の申し出により、西部軍がつくってくれた

といういわくつきのものである。

死か芸術か

わが生は
わが芸術に尽き
わが芸術は
わが死に尽く

空想をやめよ
火の如き眼目を破れ
庭に出でよ
五月の日は青く煙り
樅の蔭に蟻這入れり

孤独なる青き太陽を仰ぎ
悲哀に満てる地の上に
涙かき垂れ
われ今日も藻掻き苦しむ

つねに絶望す
われ　若ければなり

生家に建てられた
碑の誕生

に彫りつけられている。

釣りくらし帰れば母に叱られきしかれる母にわたしき鮎を（23）

愛知県新城市昭和三五年四月除幕

新城には牧水が沼津で非常に親しくしていた青年が病気で、そこに帰っているのを見舞ったり、青年の死後墓参したり前後三回訪ねたとき書き残していった「釣くらし……」の歌が歌碑となった。この歌はここでの作ではなく少年時代の追憶「鮎つりの思い出」の中の一首である。

恵那（えな）ぐもり寒けき朝を網はりて待てば囮（をとり）のさやかね音になく（12）

岐阜県中津川市に昭和二五年一〇月除幕、牧水は大正一〇年一〇月末、ここに遊んだが、そのころここは小鳥をとるかすみ網の網場で、牧水はそのかすみ網に興じ、歌をつくり酒を楽しんだのであった。

のぼり来て平湯峠（ひらゆたうげ）見ゆはるかす飛騨の平に雲こごりたり（35）

岐阜県平湯峠に昭和三八年一〇月除幕

平湯峠は乗鞍岳や焼岳にも近く海抜一、六八四米の高さにある。

かたはらに秋草の花語るらくほろびしものはなつかしきかな（2）

長野県小諸市の城跡の古石垣に刻まれている。昭和九年一一月の除幕。小諸は明治四三年秋漂泊の旅に出た時滞在したところ。

白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりけり

長野県浅間町の佐久酒造会館の庭に昭和三三年一〇月に除幕。

見よ旅人秋も末なる山々のいただき白く雪つもり来ぬ（19）

長野県蓼科牧場に昭和三三年六月建設

山出で来て尾長の鳥のあそぶらむ松代町の春をおもふよ（33）

長野県松代町、昭和三八年五月除幕。松代町は佐久間象山で知られた古い城下町。牧水は大正一四年春、この松代町に遊んだ時、家ごとに植えられた、まっさかりのあんずの花に、たくさんの尾長鳥の群れ遊んでいるのを見たが、翌年の春それを思い出しての作品

幾山河こえさりゆかば寂しさのはてなむ国ぞけふも旅ゆく（1）

牧水は昭和三年九月、沼津千本松原の陰の家で長逝した。その直後、土地の有志や門人たちによって歌碑建設が計画され、翌四年七月に除幕、歌碑は牧水が好んで散歩した松原の道の近く沼津公園にある。

香貫（かぬき）山いただきに来て吾子（あこ）とあそび久しく居れば富士晴れにけり（24）

沼津市香貫山に昭和三五年九月建設

野末なる三島の町の揚花火月夜の空に散りて消ゆなり（22）

静岡県三島町、除幕は三四年一二月

わが泊り三日四日続きるつきたるこの部屋に見る冬草の山（30）

静岡県土肥温泉、昭和三七年六月建

伊豆西海岸の土肥温泉は牧水がひどく気に入った静かな温泉で、正月などよく出かけて長滞在をしたところ

甲斐のくに小淵沢あたりの高原の秋末つ方の雲のよろしさ（10）

山梨県小淵沢に昭和二四年一一月除幕

立川の駅の古茶屋さくら樹のもみぢの蔭に見送りし子よ（13）

東京都立川駅前、昭和二五年一二月除幕

この歌は明治三九年一〇月、友人土岐善麿とふたりで武蔵野を歩いたときによんだもの。当時牧水は二一才、まだ早稲田大学の学生時代。

しらじらと流れて遠き杉山の峡の浅瀬に河鹿鳴くなり（27）

埼玉県飯能市、昭和三六年六月除幕

秩父町出はづれ来れば機織（はたおり）の唄（うた）ごゑつづく古りし家並に（16）

埼玉市秩父市、昭和三一年除幕

落葉の中に栗の実を
湿りたる
朽葉かしたに椽（たち）の実を
とりどりに
拾ふともなく拾ひもちて
今日の山路を越えて来ぬ
長かりし今日の山路
楽しかりし今日の山路
残りたる紅葉は照りて
餌に餓（う）うる鷹もぞ啼きし

上野（かみつけ）の草津の湯より沢渡の湯に越ゆる路名も寂し暮坂峠（18）

群馬県暮坂峠、昭和三二年一〇月除幕

暮坂峠は草津温泉から沢渡温泉に越える海抜一、〇八六米の峠で、この詩は大正一一年晩秋に信州上州地方を旅行したときつくった「枯野の旅」と題する一連の詩の最初に出ているものしら鳥はかなしからずや空の青海のあをにもそまずただよふ（15）

横須賀市下浦海岸、昭和二八年文化の日除幕

わが庭の竹の林の浅ければ降る雨見れば春は来にけり（31）

川崎市柿生に昭和三七年一一月建設

時をおき老樹（おいき）の雫（しづく）おつるごと静けき酒は朝にこそあれ（11）

福島県三春町、昭和二五年八月建設

ひっそりと馬乗り入るる津軽野の五所川原町は雪小止（をや）みせり（14）

櫂（そり）の鈴戸の面（も）にきこゆ旅なれや津軽の国の春の曙（14）

青森県五所川原町、昭和二七年一一月建設

大正五年三月末、牧水は五所川原に住む門下生をたづね、大釈迦駅から馬に乗せられて雪の中を五所川原町に入った。

幾山河こえさり行かば寂しさのはてなむ国ぞけふも旅ゆく（5）

北海道暮別町、昭和一二年五月建設

この歌碑の建てられている暮別町は十勝平野のある帯広市郊外にある町、大正十五年一〇月、北道道旅行中の牧水夫妻が疲れを休めるため黒田温泉に滞在した。その記念にたてられたもの。

以上は昭和三八年末までに建設された牧水の歌碑だが。三九年にはすでに山口市の瑠璃光寺に

はつ夏の山のなかなる古寺の古塔のもとに立てる旅人

が建てられ、この秋には「幾山河」の歌碑が岡山県哲西町に建てられることになっている。

（　）は建設順位

牧水祭行事

一、学童音楽会　九、〇〇～一一、〇〇
二、歌碑集　一一、二〇～一二、〇〇
三、記念講演　一三、〇〇～一四、三〇
四、祝賀会　一五、〇〇～一六、〇〇
五、学童作品展　九、〇〇～一六、〇〇